

## ごあいさつ・パートⅢ

山岸 哲

鳥学ニュースを読み返してみると、私が会長になってからこれが三回目の御挨拶になる。最初は1994年の50号で、このときは初めて会長を仰せつかったときだった。「鳥学とはこうあるべきだ」などと、かなり過激なことを書いている。次は、1996年の58号であり、こちらは再選されたときで、少し肩の力が抜けているのがわかる。今回は二期4年3ヵ月にわたった任期を終了した、お別れの御挨拶で、肩の力どころか腰の力まで抜けて、ぐにゃぐにゃになりそうだ。それでも、型にしたがって、私が会長になる際にお約束した公約じみたものを、もう一度振り返って見ることは、次の藤巻第12代会長への引き継ぎもかねて重要なことだろう。



お約束の主なものは、1) 会誌発行の遅れを取り戻す、2) 鳥類学の広い学問分野の連携を図る、3) 保護委員会を充実させる、4) 日本の鳥類学の国際化を図る、5) 目録・用語など積み残された事項を促進する、の5つだったと記憶する。「そんなに挙げて大丈夫か」と、就任の挨拶に立った壇上へ野次があったのもよく覚えている。これらがどの程度果たせたかを自己評価して（大学では昨今自己評価が流行っているので）みたい。

1) については、斎藤・松岡両氏およびこれを引き継いでくれた中村(浩)・江口両氏並びに編集委員諸氏の御努力により、年内完結はまだできないが翌3月末(国の会計年度内)までには何とか巻が完結するようになった。これ以上の短縮は、秋におこなわれる大会の会記をその巻の最終号(第4号)に掲載するという慣例を守るかぎりには少し無理のようだ。年間3号にするか4号にするかの問題も含めて残った課題である。なお、会誌発刊については1996年度より、文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費・学術定期刊行物」(約60万円)を受けることができ会計の年間赤字の一部を埋めることができた。この補助金をとり続けるには、指定されたページ数(実は自己申告なので、自分で自分の首を絞めるようになっている)をクリアしなければならず、今後ともかなりの重圧になると思われる。投稿論文数の増加を願うよりない。

2) の鳥学に関する多分野の連携は、必ずしも十分とまではいかなかったが、少なくとも生理学・分子生物学・重金属汚染の分野とはかなり握手ができたのではないかと考えている。

3) の保護委員会は、阿部氏の御努力で、国の内外の鳥類保護関連団体の連携を図るために、鳥類保護関係団体名鑑の編集に取り掛かれた。また学術振興会の研究成果公開促進費(約80万円)を受けて沖縄でヤンバルの鳥の保全に関する公開セミナーを開くことができた。これには石田氏のご協力に負うところが大きかった。

4) の国際化はかなり促進されたと確信する。大会時の特別講演に限っても、1993年には愛媛大学でA. Møller博士(国際鳥学セミナー)、1994年には上越教育大学でG. Woolfenden博士、1995年には早稲田大学でJ. Wingfield博士、1996年には沖縄国際大学でR. Walters博士(国際鳥学セミナー)、今年新潟大学でJ. Cockrem博士のお話を伺うことができた。その他

## 巻頭言

各地で行われている国際交流は数知れない。また、質の高い論文が国際誌に数多く掲載されるようになってきている。

5)の鳥類目録については、藤巻氏の御努力で最近学会誌(第46巻1号)にリストが掲載された。あとは単行本として出版することが残っている。用語については、森岡氏の御努力でまとりつつあり、第46巻3号に生態・行動が、第46巻4号に分類・形態が掲載されて終了する予定である。

こうしてみると、自画自賛ではないが、総合して60点位というところだろうか。ここまでやって来れたのは、ここにお名前を書ききれなかったが、学会役員の皆さま、また特に会員の皆さまのご協力に負うところが大きい。改めて感謝の意を表したい。

このほか、常任評議員会の創設(阿部・樋口(広)・藤岡・江崎の各氏)と議事録の作成(あまりに当たり前だが、これまでなかった)および将来計画ワーキンググループの立ち上げがある。密度の濃い常任評議員会での話し合いは評議員会の論議の焦点化・時間の節約に大いに役立ち、重要な事項の討論に時間を回せた。現在動きだした、樋口(広)氏を委員長とする将来計画ワーキンググループはこれからの鳥学会の進むべき道を明示してくれるものと期待している。

1993年からパートではあるが、専従の事務局員黒島妃香さんが学会事務に携わってくれた。彼女のおかげで、どれほど事務の迅速化が図られたかわからない。最後に、彼女の御苦勞に対し会員に代わって厚くお礼を申し述べて、会長の退任の御挨拶としたい。

(京都大学大学院理学研究科動物学教室)

## 関連学会会議

1997	11月28~30日	第16回日本動物行動学会(京都大学)
	12月4~5日	第20回極域生物シンポジウム(国立極地研究所)
1998	2月4~6日	都市の鳥害管理(カーディフ・ウェールズ)
	3月26~29日	日本生態学会第45回大会(京都大学)
	4月6~12日	1998年度北アメリカ鳥学会(セントルイス・ミズーリ)
	5月13~16日	国際シンポジウム「エコツーリズムと鳥の島」(東京都・三宅島)
	7月27~8月2日	第7回国際行動生態学会議(モンテレー・カリフォルニア)
	8月16~22日	第22回国際鳥学会議(ダーバン・南アフリカ)

## 第67回 Cooper Ornithological Society 年次大会参加記

上田 恵介

アメリカの4つの鳥関係の学会の一つ、Cooper Ornithological Society(雑誌『Condor』の発刊元)の年次大会がハワイ州のハワイ島(Big Island)のHiloにおいて、1997年の4月30日から5月4日にかけて開かれた。私は会員ではなかったのだが、ちょうどカナダの鳥関係の友人がHiloに住んでおり、来ないかと誘われたので、観光客でごった返

す連休の成田を飛び立って、ハワイ島まで行って来た。日本からの参加は私一人だったが、昨年、学会の国際シンポジウムに来日したジェフ・ウォルターズさんと旧交をあたためることが出来た。

島のホテルで行われた大会では100本の口頭発表と20本のポスター発表があった。発表の内容に関して、つぎの3点が特徴的だった。

ひとつ目は開催場所を反映して、ハワイを中心に太平洋諸島の鳥に関する発表が多く（64本）、ハワイの陸鳥については34本、他の太平洋諸島（主にアメリカ領）の陸鳥は13本、海鳥17本の発表があった。

2番目は保全生物学関係の発表が目についたことである。数えてみると保全生物学関係は77本で、全体のほぼ3分の2を占めていた。その中で、野外個体群の保全に分子系統や地域個体群の遺伝構造に関してDNAテクニックを応用した研究は10本あった。特にDNAによる系統解析法を用いて、ネネ（ハワイガン）がCanada Gooseの大型亜種起源であることを突き止めた発表は興味をそそられた。

3つ目は、発表者の所属で、全体としては大学関係者もいるものの、USDA、USGSなど政府関係部局（軍もあった）に所属している研究者が目立ち、全体の43本がこうした公的研究機関所属の研究者によるものだった。

鳥の研究者にとって、ハワイと言えばハワイミツスイ類やネネなどの固有種が頭に浮かぶだろう。諸島内の各島で分化を遂げた41種（15種はすでに絶滅）のハワイミツスイ類はアトリ科に起源を持つ一群の鳥たちで、嘴の太い大型のフィンチから、蜜を吸うための湾曲した細い嘴を持つものまで、その適応放散の度合はガラパゴスのダーウィフィンチをはるかにしのいでいる（オオなどオセアニア起源のミツスイ科（5種のうち4種は絶滅）の鳥は“ハワイのミツスイ”だが、ハワイミツスイ類ではない）。

ハワイ島はハワイ諸島の中でも最大の島で、諸島の最南端、太平洋のホットスポットに位置している。ということはハワイ諸島の中では一番年令が若い島である。また太平洋最高峰のマウナロア（4200m!）はキラウエア火山を有する有名な活火山である。日本の「すばる」などの各国の大口径天体望遠鏡のあるマウナケアはマウナロアの北にあり（これも4200m）、現在は火山活動は行っていない。山には霧が発生することが多く、高所では雲霧林が発達している。低地では年間雨量は3000ミリを超え、気候的には日本の八丈島とよ

く似た感じの島である。

この島にもイイウィヤアパパネ、アマキヒなどのハワイミツスイが残っているが、それらはすべて800m以上の高地の林でしか見ることが出来なかった。特に溶岩流に取り囲まれて焼けずに残ったキブカと呼ばれる“森の島”が彼らの最後の砦である。

一方、低地には固有種はまったく生息していない。19世紀以来、2回にわたって移入鳥から感染した鳥マラリアが低地から固有種を掃したと言われている（2回目はソウシチョウから感染したとの説がある）。メジロやヤマガラ、チョウショウバト、ハッカチョウ、イエズズメなど、低地は移入種の世界である。現在、ハワイ諸島に外部から持ち込まれている鳥の種類は150種をゆうに超えるという。高地は溶岩地帯で水たまりが極端に少ないために蚊が発生できず、固有種が生き残ったのである。だが最近では野生化したブタが穴を掘ってそこに水がたまり、蚊の発生を引き起こすことが、マラリア防除の大きな障害になっている。

ハワイ諸島に人が足跡をしるす前、島々は真っ赤な花をつけるオヒアの原生林に覆われていた。その頃にはモアとよく似た巨大な走鳥や、足が非常に長いフクロウ類も棲んでいた。ハワイミツスイ類の種数はもっと多く、形態も多様であったろう（事実、多くの化石種が現在もつけ加えられつつある）。どこへ行っても、「ここに人間が住み着く前は…」と、考えてしまう昨今である。

（立教大学・理・動物生態）

## 森林総合研究所・鳥獣生態研究室・鳥獣管理研究室

川路 則友・東條 一史

森林総合研究所は農林水産省林野庁に属する試験研究機関で、1988年に国立林業試験場の組織改変により誕生しました。現在では、つくば研究学園都市に位置する本所のほか、北海道（札幌）、東北（盛岡）、関西（京都）、四国（高知）、九州（熊本にそれぞれ位置する）の各支所、多摩森林科学園および木曽、千代田、小笠原、高萩、十日町、多摩の各試験地等が含まれます。農林省における鳥類研究は、古くは内田清之助、清棲幸保、松山資郎氏らといった著名な研究者を輩出した山林局鳥獣調査室に端を発し、戦後、林野庁林業試験場鳥獣研究室となってからは、池田真次郎、宇田川竜男氏らといった諸先輩も研究に勤しまれました。現在、鳥獣関係の課題のみを扱う研究室は、全国で6研究室あり、そのほかに四国支所や多摩森林科学園では、1つの研究室で昆虫や樹病関係とともに鳥獣類に関する課題も取り扱うというシステムになっています。なお、関西支所鳥獣研究室は5年前、九州支所鳥獣研究室は今年度に新設されたものです。研究所の組織全体でみると、常勤職員として鳥類関係の研究者が11名、哺乳類に関する研究者が14名おります。その他に科学技術庁特別研究員やSTAフェローとして2名の研究者が所属しています。

つくばの本所には、標記の2研究室（鳥獣生態研究室および鳥獣管理研究室）があり、そのうち鳥獣生態研究室（以下生態研）は森林生物部の森林動物科に属し、鳥獣管理研究室（以下管理研）は同部の生物管理科に入ります。前者は森林性鳥獣類の生態的な基礎資料の蓄積を行い、後者はそれらをもとにした、森林性鳥獣類に関する被害防除法ならびに個体群管理手法の開発に関する研究を行うという分担になっております。現在、生態研の室員は3名で、希少動物の生態と保護、生物種間の相互関係、生物多様性の保全などの課題を扱っています。そのうち2名は哺乳類研究者で、とくにアマミノクロウサギの保全生物学的研究を行っているほか、1名はブラジルへ長期出張中です。現在持っている鳥類に関する課題は、鳥類による種子の散布と消費、

温帯林の持続可能な管理に関する基準・指標作りに関わるものです。後者はモンテリオールプロセス（温帯林等の保全と持続可能な管理に関する基準・指標）に関する問題について、森林総合研究所がつくばに比較的近い国有林をモデル地区に指定して積極的に取り組んでいるもので、鳥類に関してはモニタリング手法の開発や帰化鳥類による種多様性への影響を研究しています。

管理研には室員が3名おり、おもにニホンジカの個体数管理技術の開発と大型哺乳類のMVP（最小生存可能個体数）算出等に関する研究、ニホンカモシカの土地利用に関する研究等を行っておりますが、最近新たに鳥類に関する課題（南西諸島における希少鳥類の保全生物学的研究、ヤマドリ個体群管理に関する研究）にも着手し始めたところです。

当所へ就職を希望される場合には、すでに同ニュース33号で東北支所の由井正敏氏が記述しておられることの反復になりますが、国家公務員1種試験（林業職）による採用と、特定の課題に対する専門家としての公募による選考採用という2つの選択肢があります。ただし前者の場合には受験可能な年齢に制限が設けられていること、後者の場合には原則として学位取得者が対象であり、必要とされる分野がその都度限られるという制限があります。しかし、従来の林業に関連した問題のみならず、森林の公益的機能、森林環境の保全管理、生物多様性の保全等の問題が声高く叫ばれている昨今、ますます森林性鳥獣類に関する研究の必要性が強調されてきていますので、ぜひ新進気鋭の鳥類研究者による勇気あるチャレンジを期待しています。

（森林総合研究所）

## 〔連絡先〕

〒305 茨城県稲敷郡茎崎町松の里1  
 農林水産省 森林総合研究所 森林生物部  
 Tel.0298(73)3211 Fax.0298(73)1543  
 森林動物科 鳥獣生態研究室 Ext.413  
 （東條一史 tojo@ffpri.affrc.go.jp）  
 生物管理科 鳥獣管理研究室 Ext.417  
 （川路則友 kawajin@ffpri.affrc.go.jp）

---

## 学術集会のお知らせ

### 都市の鳥害管理

会 期：1998年2月4日(木)～6日(金)

場 所：カーディフ・ウェールズ

お問い合わせ：Bird Conference Secretariat, University of Wales, PO Box 915, Cardiff,  
UK CF1 3TL.

E-mail. insect@cf.ac.uk

### 日本生態学会第45回大会

会 期：1998年3月26日(木)～29日(日)

会 場：京都大学総合人間学部・人間環境科学研究科（各種委員会を除く）、京都大学理学部  
2号館（各種委員会のみ）

日 程：3月26日(木) 各種委員会、自由集会

3月27日(金) 一般講演（口頭、ポスター）・自由集会

3月28日(土) 自由式シンポジウム・一般講演（口頭）・総会・学会賞受賞記念  
講演・懇親会

3月29日(日) 一般講演（口頭、ポスター）・公開シンポジウム

申し込み・お問い合わせ：〒606 京都市左京区北白川追分町 京都大学理学部動物学教室  
動物生態学研究室気付 JES45（第45回日本生態学会大会準備委員会）  
Tel. 075-753-4092（堀）・075-753-4079（村上）・075-753-4255（山村）  
Fax. 075-753-4101（JES45あて）

E-mail. JES45@ecol.zool.kyoto-u.ac.jp

大会参加・一般講演申し込みおよび講演要旨の締め切り：1997年12月15日(日)

### 日本生態学会第45回大会公開シンポジウム（大会準備委員会企画）

日 時：1998年3月29日(日)

会 場：京都大学農学部

テーマ：地球環境と生態学

講演者：和田英太郎（京都大学生態学研究センター）、中野 繁（北海道大学演習林）、  
上 藤 岳（第1回日本生態学会賞受賞者、北海道大学・地球環境研）

### 1998年度北アメリカ鳥学会

会 期：1998年4月6日(日)～12日(日)

場 所：セントルイス・ミズーリ

お問い合わせ：Dr. BetteLoiselle

Department of Biology & International Center for Tropical Ecology

University of Missouri-St. Louis

8001 Natural Bridge Rd. St. Louis, MO63121

Tel. 314-516-6224 Fax. 314-516-6233

E-mail. bird.st@umsl.edu

本情報は、<http://www.umsl.edu/~biology/icte/bird98/main.html> (Noeth American Ornithological Conferenceのホームページ)でもご覧になれます。

---

## 学術集会お知らせ

---

### 国際シンポジウム「エコツーリズムと島の鳥」

三宅村は、島の自然を残しながら自然とふれあえる拠点として設立されたアカコッコ館が、開館5周年を迎えるのを機会に、エコツーリズムと島の鳥をテーマにした国際シンポジウムを開催します。内容は以下の通りです。

主催：東京都三宅島三宅村

会期：1998年5月13日(水)～16日(土)

会場：三宅島自然ふれあいセンター・アカコッコ館

日程：第1日目：5月13日(水) 開会・記念式典 基調講演 懇親会

第2日目：5月14日(木) 研究・事例発表

第3日目：5月15日(金) 研究・事例発表

第4日目：5月16日(土) エクスカーション 公開講演会

講演予定者：Hector Ceballos-Lascurain (メキシコ・IUCNエコツーリズムアドバイザー)

A. W. Diamond (カナダ・ニューブランズウィック大)

Jacques Blondel (フランス・CNRS)

橘川 次郎 (オーストラリア・クィーンズランド大) (同時通訳あり)

※島の鳥の個体群動態、種分化、移入種と人間活動の影響、海鳥の生態と保護、島の鳥とエコツーリズムに関連した発表を募集しています。

※シンポジウムでの発表および参加を希望される方は、下記の住所にご連絡下さい。詳しい内容と参加申し込み書をお送りします。

お問い合わせ：〒100-12 東京都三宅島三宅村坪田4188  
三宅島自然ふれあいセンター・アカコッコ館  
Tel. 04994-6-0410 Fax. 04994-6-0458  
E-mail. RXR13202@niftyserve.or.jp

### 第7回国際行動生態学会議

会期：1998年7月27日(月)～8月2日(日)

(注. 以前お知らせした日程から少し変更されています。)

会場：モンテレー・カリフォルニア・Asilomar Conference Grounds

お問い合わせ：Dr. Walt Koenig

E-mail. wicker@uclink.berkeley.edu

本情報は、<http://socrates.berkeley.edu/~isbe98/> (INTERNATIONAL SOCIETY FOR BEHAVIORAL ECOLOGYのホームページ) でもご覧になれます。

---

## 学術研究助成のお知らせ

昭和聖徳記念財団から下記のとおり学術研究助成募集の案内がきましたのでお知らせします。なお、詳しい募集要項と申請書は鳥学会事務局にありますので、申請される方は事務局までお問い合わせ下さい。

【対象研究分野】 系統分類学およびその周縁にわたる研究、医学関係の研究。

【金額】 原則として一件当たり200万円以内。

【期間】 2年以内。

(7頁へ続く)

- 
- 【使 途】申請された目的および内容で、研究上必要であれば特に制約はなし。
- 【資 格】原則として学術研究機関等に属している人、またはグループ。グループの場合は代表者を明確にすること。
- 【申 請】財団所定の申請書を使用し、下記あてに提出すること。  
〒100 東京都千代田区大手町1-6-1 大手町ビル402号  
財団法人昭和聖徳記念財団 学術研究助成係  
TEL. 03-3211-2451 (代) FAX. 03-3211-7747
- 【締 切】平成9年12月17日(木)必着。
- 

## お 知 ら せ

### 【選挙管理委員会】

日本鳥学会次期会長・評議員選挙開票結果

8月1日から8月31日にかけて行なった次期会長・評議員選挙の開票を、9月1日大阪市立自然史博物館集会室に於て、須川 恒氏の立ち合いのもとに行ないました。有権者は930名、投票率は各々33.5%、32.2%で、結果は以下のとおりです。任期は1998年1月1日～1999年12月31日。

会長選挙（有効票数 309票、無効票数 3票）

藤 巻 裕 蔵	169票	当選
樋 口 広 芳	140票	

評議員選挙（有効票数 250票、無効票数 49票）

上 田 恵 介	152票	当選	黒 田 長 久	60票	当選、辞退
樋 口 広 芳	127票	当選	藤 岡 正 博	59票	当選
藤 巻 裕 蔵	122票	会長に当選	中 村 司	51票	当選、辞退
山 岸 哲	107票	当選	福 田 道 雄	49票	当選
中 村 登 流	92票	当選、辞退	尾 崎 清 明	44票	繰上当選
唐 沢 孝 一	89票	当選	松 岡 茂	44票	繰上当選、辞退
阿 部 學	87票	当選	中 村 雅 彦	42票	繰上当選
中 村 浩 志	81票	当選	浦 野 栄 一 郎	42票	繰上当選、辞退
石 田 健	72票	当選	大 庭 照 代	42票	繰上当選
江 崎 保 男	68票	当選	川 路 則 友	41票	次点
森 岡 弘 之	67票	当選			(以下省略)

評議員定数は15名以内。会則第9条第1項に「会長は評議員となる」と規定されているので、会長当選者を除く上位14名が当選となります。辞退者があったので、3名を繰り上げ当選としました。

(選挙管理委員長 樋口 行雄)

## 事務局を終えるにあたって

黒島 妃香

チョウガッカイ、って何？と思いつつもこの仕事を始めさせてもらって、早4年が過ぎようとしています。事務職の経験はない、コンピュータは使えない、お金の計算も得意ではない、ナイナイづくしのこの私が「事務局を終えるにあたって」などというタイトルの文章を書くに至る経過を考えると、会長をはじめ役員の方皆さん、事務局のあった大阪市立大学の動物社会学研究室の方皆さん、そしてもちろん会員の皆さんに感謝しなければならないと思います。鳥学会の長い歴史の中では4年なんて本当に短い期間ではありましたが、私にとっては貴重な経験となりました。至らぬところも多かったと思いますが、本当にありがとうございました。

来年度より事務局は次期会長である藤巻裕蔵先生の元へ移動します。これから残りの期間は移転作業に追われることと思います。そして最大の難関は新郵便番号への書き換え作業だと思われれます。来年度からの郵便物は7桁の郵便番号で届くことを楽しみにして下さい。

**訂正** ニュースNo.64、1ページ5行目、安部公房の安部が阿部になっておりました。

謹んで訂正させていただきます。

### 編集後記

●鳥学ニュースNo.59から本号No.65まで編集作業のお手伝いをさせていただきました。慣れないことで不手際も多かったと思いますが、なんとか最後まで発行することができほっとしています。この仕事をさせていただいて得したと思うのは、会員の方々のお名前をたくさん覚えることができたということ。あまり学会に出席したことがないので人の顔は知らないのですが、顔は知らなくてもお名前とどんな仕事をされているかについては知っている、という方がずいぶん増えました。これから学会などで見覚えのあるお名前の方にお会いしたら、「ああ、あの〇〇さん…」という挨拶をするかもしれません。そのときはどうぞよろしくお願ひします。(水田)

●上田前編集長から引き継いで丸4年、最初で最後の編集後記です。16号分をならべてみると、頭に「超」がつくオーソドックスな編集ぶり、我ながら感心するやら、呆れるやらです。ともかくにも毎回無事に発行できたのは、若くて優秀な相棒たちの存在があったからです。人使いのあらい編集長をささえてくれたこれらの方々に深く感謝します。

(江崎)

ニュースの編集は次号から北海道の綿貫 豊さんに引き継がれます。

原稿の送り先は

〒060 札幌市北区北9西9 北海道大学農学部応用動物学講座 綿貫 豊  
(TEL 011-706-2485、FAX 011-757-5595)

## 鳥学ニュース No.65

1997年11月1日 発行 (会員配布)

発行 日本鳥学会

〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部 動物社会学研究室気付

TEL. 06-605-2607 FAX. 06-605-3172 郵便振替口座 00110-0-6599

発行人 山岸 哲

印刷所 (株)丸二印刷

編集 江崎保男・水田 拓

TEL. 06-621-9077